東海心理学会第 53 回大会発表論文集　2004 年 5 月 23 日　愛知淑徳大学

過剰適応に関する研究

－欲求不満場面における攻撃性表出の観点から－

○小野 由衣子　　宮本 正一
(岐阜大学教育学研究科)　(岐阜大学教育学部)

Key Words ：過剰適応，攻撃性，投影法

【目的】

「よい子」として無理をしてきた子どもたちは，挫折する危険と背中合わせの状態にある。その挫折が不登校や引きこもり，摂食障害などの問題に転化していくとして，「よい子」に関する数多くの研究が重ねられてきた。本研究では「よい子＝過剰適応している子ども」と捉え，研究を進めた。

過剰適応とは，外的適応と内的適応の不均衡状態である。つまり，外の環境に対して非常に適応的であるように周囲には映っても，本人が著しい不満や不安を抱えている状態を過剰適応状態と定義した。過剰適応の特徴として,「自己主張への不安」から主張行動を抑制し，心身の健康に大きな影響を及ぼすことが確認されている。

そこで本研究では，過剰適応の特徴が顕著に現れる攻撃性に焦点を当て，親・教師・中学生がフラストレイターとなる 3 種類の欲求不満場面における攻撃性の表出の方向と過剰適応得点との関連を分析し，そこから中学生の過剰適応状態について場面を超えた安定性が示されるか否かを検討することが目的である。

【方法】

対象：調査対象は，岐阜県内の中学 2 年生 345 名(男子 159 名，女子 185 名)であった。

調査内容：以下の内容を含む質問紙を集団で実施した。実施時期は，平成 15 年 10 月中旬から 11 月中旬であった。

①投影法(小野 2003)：欲求不満の原因が[親・教師・中学生]の 3 パターンあり，自我阻害場面（他者または非人為的な障害が原因となってフラストレーションが起きている場面), 超自我阻害場面（フラストレーションの原因が自分にあって，相手から非難や叱責を受けている場面）を各 2 場面，計 12 場面を設定し,「吹出し」に反応語を書き込む形式で回答を求めた。3 人の評定者が，P-F study の評定基準に従い，反応語に対して, 他責反応, 自責反応, 無責反応の評定を行った。

②過剰適応尺度：桑山(2003)を改定した 25 項目を 5 件法で回答させた。

【結果と考察】

①因子構造：主成分分析(バリマックス回転)を行い，固有値の推移状況と回転後の解釈可能性を考え, 2 因子を抽出した。負荷量の下限値は 0.4 とし，複数の項目に高い負荷量を示している 9 項目を除いて，再度主成分分析にかけたところ，2 回目ですべての項目が条件を満たしたので，そこで因子分析を終了した。2 因子までの累積寄与率は 40%であった。第一因子は，自分自身についての自信の無さや，主張行動に戸惑いを感じていることに関する項目であったため,「自信の無さ因子」と，第二因子は，周囲から優れた評価を得る存在になろうとする他者志向的な態度を中心とした項目であったため,「他者志向因子」と命名した。この因子構造から，過剰適応には対自的な面と対他的な面があることを確認できた。

それぞれの因子得点における性差を検討したところ,「自信の無さ」の因子得点は女子の方が有意に高かった(t=3.39,p<.001)。したがって，女子は男子より自己主張に対して不安を抱えていることが明らかになった。

②過剰適応尺度と投影法への反応との関連：他責，自責，無責反応の表出に，過剰適応尺度の各因子得点高・中・低群と性の要因がどのように関係しているかを検討するため，[性×自信の無さ因子]と[性×他者志向因子]の 2×3 の 2 要因分散分析を実施した。結果，両者で無責反応における性の主効果が得られ(F[1,339]= 3.77, p<0.1; F[1,339]=4.50, p<.05), 無責反応の表出は男子に多いことが明らかになった。無責反応をとる背景には，他者から見捨てられることへの不安，つまり愛情喪失への不安があると考えられている。したがって，たとえ欲求不満を感じた場合であっても，男子は女子よりも周囲の人々との間に摩擦が生じないように心がけて行動しているのではないかと思われる。

次に，過剰適応の 2 因子が，欲求不満場面でどの反応の表出と関連があるのかを検討するため，各々の反応数を従属変数とし, [自信の無さ因子×他者志向因子]の 3×3 の 2 要因分散分析を実施した。結果, 他者志向的な態度の高い中学生は，自責反応を高く表出し，他責反応を抑制することが明らかになった。つまり，他者を志向する態度は，欲求不満場面で感情をそのまま表出するのではなく，自分自身に向けていく機制につながっていくと言える。

③課題場面の影響性：欲求不満の対象要因(親・教師・中学生)と阻害要因(超自我阻害・自我阻害)の影響が，各々の反応語とどのような関係をもつかを検討するため, [自信の無さ因子×対象×阻害]と[他者志向因子×対象×阻害]の 3×3×2 の 3 要因分散分析を実施した。

各反応（他責・自責・無責）における自信の無さ因子と対象要因の交互作用(F[4,684]=3.33, p<.01; F[4,684]=2.89 , p<.05; F[4,684]=3.73 , p<.05), 自責反応における，他者志向因子と阻害要因の交互作用が確認された(F[2,342]=8.50, p<.001)。その詳細は，以下の通りであった。他責反応は中学生に対して表現されやすく，自責反応は中学生＜親＜教師の順に表出数が多かった。また，無責反応は，親に対して表出数が多かった。つまり，親の一言に対して，自らの中に苛立ちや怒りが生まれても，その感情をごまかし，率直に主張することを避けているのだと言える。さらに，自責反応の表出に関しては，次のような結果も得られた。超自我阻害場面では，他者志向因子の得点が高くなるほど，自責反応の表出が多かった。つまり，これは，自分の評価が低まる場面に出くわすと，評価を回復しなければならないという思いが生じ，外界に対してより適応的に振舞うことを意味している。

以上より，日常的にほめられることが多く，叱責される経験の少ない過剰適応の中学生は，自分の評価が著しく傷つけられる場面に出くわすと，いち早く他者からの評価を回復しなければならないという思いが生じ，外界に対して一段と適応的に振舞うのだと考えられる。他者から良い評価を得ようと躍起になることが，内的状態を阻害する要因になっていることが予想され，検討を続けていく必要があるだろう。

（ONO, Yuiko ; MIYAMOTO, Masakazu）

ISSN 1880-6422

東海心理学研究

第1巻
2005年10月

■原著論文
小池はるか　吉田俊和
対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連 …… 3
—受け手との関係性についての検討—
小野由衣子　宮本正一
親・教師・友達が関わる欲求不満場面での過剰適応と攻撃性の関連 …… 13
遠山孝司
回想的な方法による親と教師の威厳ある養育・指導態度尺度の作成 …… 21
長屋佐和子　辻佐知子　古井景　深津千賀子
母親の妊婦の日本版 IFEEL Pictures 反応の比較検討 …… 30
■資料
石田靖彦
中学校新入生の交友関係の形成過程に関する縦断的研究 …… 39
—動機づけ志向性における類似性の観点から—
■展望
二宮克美
日本における向社会的行動研究の現状 …… 45
—この20年間の歩みと課題—

東海心理学会

東海心理学研究 2005年 第1巻 pp. 13-20

原著

親・教師・友達が関わる欲求不満場面での過剰適応と攻撃性の関連

小野由衣子　宮本正一（岐阜大学）

A Study on Over-adaptation: By Means of Expressions of Aggression in Frustrating Situations Involving A Parent, A Teacher and A Friend

Yuiko ONO and Masakazu MIYAMOTO (*Gifu University*)

Over-adaptation is defined as a state of imbalance between outer adaptation and inner adaptation. This current study examines the relationship of aggressive expressions with regard to frustrating situations and the Over-adaptation scores. A questionnaire on the scale of Over-adaptation and a picture-frustration test involving a parent, a teacher and a friend were administered to the second grade of a junior high school. The aggressive expressions were classified into three categories: "extraggression", "intraggression" and "imaggression". The factor analysis showed that an Over-adaptation scale consisted of the following two factors: "the lack of confidence factor" and "the others-orientated factor". Participants who received high scores in "the other-oriented factor" didn't express "extraggression" but showed more "intraggression" than other low-scoring participants. ANOVA showed that it was easy for participants to express "extraggression" with friends, "intraggression" with teachers and "imaggression" with parents.

Key words: over-adaptation, "iiko", aggression, junior high school students, projective technique

問　題

「自分の感情よりも周囲からの期待を重視して，評価が高くなるように振舞う子」（山川，2001），いわゆる"よい子"の不適応行動について，いくつかのケースが報告されている。例えば，「自分が無い」と語った不登校の高校生女子は，見捨てられ不安を打ち消すために中学までは"よい子"を演じてきたという背景があった（長坂，1997）。また，向出（2000）は，"よい子"における思春期やせ症の影には，幼い頃からの母親の根深い支配による自我の窒息状態や，相手に対して絶えず異常に気を遣い，無理に合わせている窮屈さ，自分の言葉や感じ方を持たない生き生きとした自己表現の欠如が見られたと報告した。以上のことから，"よい子"とは表面的には素直に大人の言うことを聞き，実行し，成績が良く，明るく元気に振舞う適応的な面と，自分が何を感じ，何をやりたいのかを明確にできないという面がある。"よい子"の特徴だと言えるだろう。"よい子"として無理をしてきた子どもたち，あるいは優等生として走りつづけてきた子どもたちは，目に見えない部分の問題を表面的な適応の良さで覆い隠していることが考えられる。本研究は，そのような"よい子"を過剰に適応している子どもとして捉え，その実態を明らかにしようとする試みである。

適応とは，主体としての個人が，欲求を満足させながら環境の諸条件に対して調和的関係を持てるよう，多少なりとも自分を変容させる過程である（北村，1965）。したがって，個人と環境との間に調和的関係が成立すれば，それは適応状態であり，緊張や葛藤が生じれば不適応状態だと考える。この個人と環境の関係は，外的適応と内的適応の二側面から捉えることができる。北村によれば，外的適応は，社会的・文化的適応とも呼ばれ，社会や現実の要求に応じて，自分の属性を変化させていく過程と状態を意味する。また，内的適応は，内面的に幸福感と満足感を経験し，心的状態が安定していることを意味する。一般的には，この二側面は協調的に働くが，時にアンバランスな働きを見せることもある。そのひとつが過剰適応（over-adaptation）であると考えられる。

真面目人間，仕事中毒，模範的，がんばり屋，頼まれると嫌とは言えない，周囲によく気をつかうなどの傾向を持つ人々を総称して，過剰適応という言葉が用いられている（吉川・斎藤・衛藤，2002）。過剰適応とは，Sifneos, P. E. の提唱した alexithymia と並んで，いわゆる心身症患者に多くみられる傾向のひとつであるとさ

れている（福西，2001）。

桑山（2003）は，過剰適応と外的適応及び内的適応のあり方について検討した。その結果，過剰適応的な態度は，周囲との摩擦を回避してその場を収めようと努めているという点で外的適応を促すものであるが，自分の心の中に生じた生の感情に向き合うことを妨げる点で内的適応に歪みを生じさせるものであることを明らかにした。また，吉川ら（2002）は，過剰適応尺度の作成を試み，「自己主張への不安」「他者の期待に沿う努力」「親の期待に沿う努力」「他者への不信」「家族への不信」の5因子構造を明らかにしている。

以上より，過剰適応とは，社会の要求や期待に応える努力は惜しまないことから，外的適応は非常に良い。しかし，本来なら外的適応が良ければ，それに伴う内的適応も良いことが多いとされる中で，過剰適応は「他者への不信感」「自己主張への不安」などの特徴を持つことから，内的適応は困難な状態にあるといえる。以上の先行研究に基づき，本研究では，過剰適応を外的適応が重視され，内的適応が優れないアンバランスな状態として定義する。

過剰適応に関するこれまでの研究は，専らその概念の構築に力が注がれてきた。橋本・斎藤・衛藤（2003）は，過剰適応と心身の健康状態との関連を検討した。そこでは，吉川らの作成した過剰適応尺度の「自己主張への不安」「他者の期待に沿う努力」「他者への不信」「家族への不信」の4因子と精神的健康度の関連が示された。ここで注目すべきことは，「親の期待に沿う努力」は，精神的健康を阻害するようには働いていないことである。過剰適応を理解しようとする際，親や家族の存在がどう捉えられているかということは，重要な手がかりになると言える。また，身体的健康度に関しては，「自己主張への不安」「家族への不信」との関連が示された。特に，「自己主張への不安」からの影響が強く見られたことから，適切な主張ができないこと，主張を抑制してしまうことが，心身の健康に大きく影響すると考えられる。

以上より，自己主張，感情表現をはじめとする主張性の弱さを特徴とする過剰適応の実態を明らかにするには，その主張性を問われる場面において検討することが必要である。“よい子”として育ってきた子どもは，特に反抗心や敵意のようなネガティブな感情を「悪」として捉え，抑圧する（渡辺，1977）。したがって，ネガティブな感情を喚起される場面では，自らの内に起こってきた感情や考えをどう扱うかという点で，過剰適応している者に特徴的な対処が浮き彫りになるのではないかと考えられる。そこで，過剰適応の特徴が顕著に現れると思われるネガティブな感情の内，攻撃性に焦点を当て，中学生にとって重要な存在である親・教師・友達が関わる欲求不満場面を設定することにした。その場面での攻撃性の表出方向と過剰適応得点との関連を分析することで，中学生における過剰適応の実態について明らかにすることが，本研究の目的である。

方　法

1．調査対象者と実施手続き

(1)　**調査対象**　公立中学校2校の中学2年生345名（男子159名，女子186名）

(2)　**調査方法**　学級担任に実施を委託。集団で実施。所要時間は約20分。

(3)　**調査時期**　2003年10月中旬～11月中旬

2．調査内容

(1)　**過剰適応尺度**

桑山（2003）で作成され，信頼性および妥当性が共に適切に検討された過剰適応尺度を一部修正した尺度を使用した。中学生が項目の意味を理解しやすいように，表現を変更して用いた。25項目について，どのくらい自分にあてはまるかを，「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」の5件法で回答を得た。

(2)　**Parents Teacher Friend 絵画欲求不満テスト**

本研究のために，筆者が作成したテストである（以下，PTF テストとする）。P-F study と同様に，吹き出しに発言内容を書き込む形式で回答を求めた。呈示した場面は，親・教師・仲間との関係において，中学生が日常的に経験していると考えられる欲求不満場面を計12場面（内訳は，自我阻害場面（他者または非人為的な障害が原因となってフラストレーションが起きている場面）と，超自我阻害場面（フラストレーションの原因が自己にあって，相手から非難や叱責を受けている場面）を各2場面，交互に呈示）であった。刺激語を Table 1 に，実際に用いた図版の一部を Figure 1 に示した。

回答の評定は，P-F study 解説（林，1987）の評点因子一覧表を参考に，筆者を含む3人の評定者が独立に評定を行った。本来，P-F study の評定は，aggression の方向と aggression の型（各3水準）を組み合わせた9つの反応カテゴリーに分類されるが，本研究では，欲求不満場面で喚起された感情をどこに向けて表出するのか，その aggression の方向を分析することが目的である。そのため，反応語を他責的（Extraggression），自責的（Intraggression），無責的（Imaggression）の3つの反応カテゴリーに分類した。

Table 1
刺激語の一覧

		親が中学生に話しかけている場面
超自我阻害	1	「え！？家の鍵をなくしたの？中に入れないじゃない。困ったな。」
	2	「塾を休んでばかりいるから。今回のテストも悪い点数なんだよ！」
自我阻害	3	「ジーパンは，今洗濯しているから，今日は着て出かけられないよ。他の服を着なさい。」
	4	「あの子と遊んでばかりいると，内申点が悪くなるでしょ。」
		学校の先生が中学生に話しかけている場面
超自我阻害	5	「君は毎日忘れ物ばかりしているじゃないか。」
	6	「いい加減なことばかりしているじゃないか。あなたは，自分の係に責任をもっていない。」
自我阻害	7	「間違えて，君の答案用紙を違う生徒に返してしまった。」
	8	「君に部長をお願いしていたが，部長にふさわしい生徒が他に見つかった。」
		中学生が中学生に話しかけている場合
超自我阻害	9	「おまえはうそつきだ！そんなヤツとは，もう一緒にいたくない。」
	10	「お前が失敗したせいで，この前の試合は負けたんだ。」
自我阻害	11	「ぼくの勝ちだ！じゃあ，これは全部，ぼくがもらっていくよ。」
	12	「きみに借りていたノートだけど，妹がビリビリにやぶってしまった。」

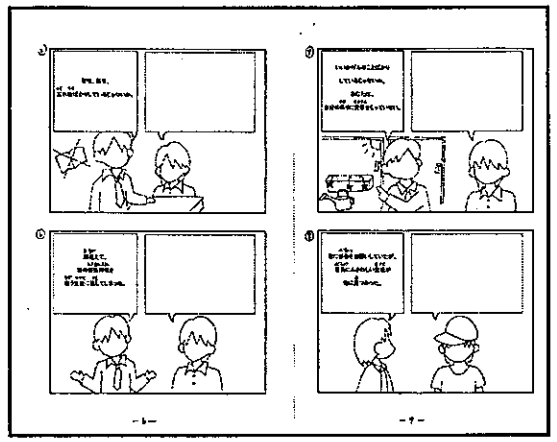


Figure 1
PTF テスト（例，教師場面）

結　果

1．因子構造

得点が高くなるほど過剰適応を示すように構成した過剰適応尺度25項目に対して，因子構造を明らかにする目的で主成分分析（バリマックス回転）を行い，固有値の推移状況と回転後の解釈可能性を考え，2因子を抽出した。負荷量の下限値は0.4とし，複数の項目に高い負荷量を示している9項目を除いて，再度主成分分析にかけたところ，2回目ですべての項目が条件を満たしたので，そこで分析を終了した。2因子までの累積寄与率は40%であった。主成分分析の結果を Table 2 に示した。

第1因子は，自信の無さや，主張行動に対する戸惑い，他者評価に対する不安を感じていることに関する項目であるので，「自信の無さ」と命名した。第2因子は，周囲から優れた評価を得る存在になろうとする他者志向的な態度を中心とした項目であるので，「他者志向」と命名した。この因子構造は，桑山（2003）において検討された過剰適応尺度のものとほぼ一致した結果であった。

これらの2因子について因子得点を算出し，t 検定により性差の検討を実施した。その結果，「自信の無さ」の因子得点の平均値は，男子－0.19（$SD = 1.00$），女子0.17（$SD = 0.97$）であり，女子の因子得点が男子に比べて有意に高かった（$t(343) = 3.39$，$p < .001$）。「他者志向」では，男子の平均値が0.05（$SD = 1.04$），女子－0.04（$SD = 0.97$）で，有意差は認められなかった（$t(343) = 0.86$，$n.s.$）。

2．過剰適応尺度とPTFテストの反応との関連

全調査対象者の各因子得点を得点順に並べ，145名ずつ3群に等分割した。「自信の無さ」について因子得点の低い方から，1L群，1M群，1H群とし，「他者志向」について2L群，2M群，2H群とした。

過剰適応尺度の2因子と欲求不満場面における攻撃性の表出方向との関係を検討するため，他責反応，自責反応，無責反応の反応数を従属変数として，3×3の2要因分散分析を実施した。その結果，他責反応の表出において，「他者志向」因子の主効果（$F(2,336) = 3.04$，$p < .05$）及び交互作用（$F(4,336) = 2.51$，$p < .05$）が有意であった。そこで，HSD検定による多重比較を実施したところ，2L群の得点（$M = 6.17$，$SD = 2.18$）が2H群（$M = 5.41$，$SD = 2.26$）に比べて有意に高かった。

Table 2
主成分分析（バリマックス回転）の結果

項　　目	第1因子	第2因子
● 自信の無さ		
12　自分の言ったことやしたことに自信がない	0.785	0.071
19　間違ったことを言ったり，したりするのが怖くて，引っ込み思案になる	0.743	0.143
25　本当の自分を出すと人に嫌われるのではないかと思う	0.697	0.068
23　自分の意見を言うことが少ない	0.645	−0.220
2　周りの人が自分をどう評価しているかが気になって，したいように行動できない	0.639	0.329
14　周りの人の顔色をうかがってしまう	0.583	0.355
24　自分のことについて考えるのが苦手だ	0.490	−0.203
9　周りの人に反対されると自分の意見を変えてしまう	0.474	0.169
20　自分が悪かったのではないかと後悔することが多い	0.469	0.236
● 他者志向		
17　周りの人に迷惑をかけないようにいつも気を配っている	0.263	0.654
13　たいていの規則は守っている	0.116	0.636
4　親の言いつけはほとんど守っている	−0.078	0.631
7　親や先生の期待にはできるだけ応えるように努力する	−0.075	0.613
3　いつもほめられたいと思っている	0.101	0.558
5　自分がどうしたいかよりも，どうすべきかの方が先に思い浮かぶ	0.058	0.440
16　自分がどう感じているかに関係なく，目上の人の言うことはきく	0.268	0.424
二　乗　和	3.68	2.73
寄　与　率(%)	23.02	17.06
累積寄与率(%)	23.02	30.08

自責反応の表出において，「他者志向」因子の主効果（F (2,336) = 10.0, p<.001）が有意であった。そこで，HSD検定による多重比較を実施したところ，2L群（M = 3.13, SD = 1.56）より2H群（M = 4.13, SD = 1.54）が，2M群（M = 3.57, SD = 1.68）より2H群（M = 4.13, SD = 1.54）の自責反応数が有意に多かった。無責反応の表出に関しては，有意差は認められなかった（F (2,336) = 0.55, $n.s.$; F (2,336) = 0.56, $n.s.$; F (4,336) = 1.65, $n.s.$）。したがって，他者志向的な者ほど，他責反応が少なく，自責反応が多いことが示された。

次に，攻撃性の表出方向の性差について検討するため，各反応数を従属変数として，［性×各因子の水準］の2×3の2要因分散分析を実施した。その結果，無責反応において，性の主効果に有意な傾向及び有意差が認められ（F (1,339) = 3.77, p<0.1; F (1,339) = 4.50, p<.05），男子（M = 2.80, SD = 1.72）が女子（M = 2.43, SD = 1.68）より無責反応を多く表出する傾向が確認された。

3．課題場面の影響性

対象要因と阻害要因の影響が，攻撃性の表出方向にどう関連するかを，過剰適応尺度の各因子の群間で比較し，検討した。［自信の無さ因子（1L群・1M群・1H群）×対象（親・教師・中学生）×阻害（超自我阻害・自我阻害）］と［他者志向因子（2L群・2M群・2H群）×対象（親・教師・中学生）×阻害（超自我阻害・自我阻害）］の3×3×2の3要因分散分析を実施した。

①他責反応の表出について

「自信の無さ」因子と対象要因の交互作用が有意であった（F (4,684) = 3.33, p<.01）。下位検定の結果，対象要因の単純主効果が「自信の無さ」因子の全ての群において有意差が認められた。多重比較を行った結果，1L群・1M群・1H群全てにおいて，親や教師より中学生に対して他責反応を多く表出することが明らかになった（Figure 2）。また，対象要因と阻害要因の交互作用が有意であり（F (2,684) = 80.65, p<.001），下位検定の結果，対象要因の単純主効果が超自我阻害場面，自我阻害場面の双方で認められた。多重比較の結果，超自我阻害場面では，他責反応が教師（M = 0.25, SD = 0.51），親（M = 0.63, SD = 0.69），中学生（M = 1.09, SD = 0.76）という順に多くなることが明らかになった。一方，自我阻害場面では，親（M = 1.15, SD = 0.74）よりも教師（M = 1.30, SD = 0.70），中学生（M = 1.37, SD = 0.70）に対して，他責反応は多く向けられた（Figure3）。

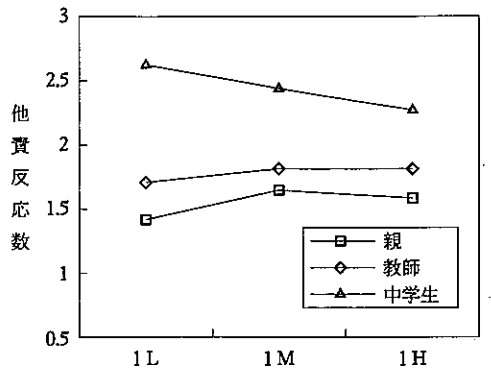


Figure 2
自信の無さ水準と対象要因別にみた他責反応数の違い

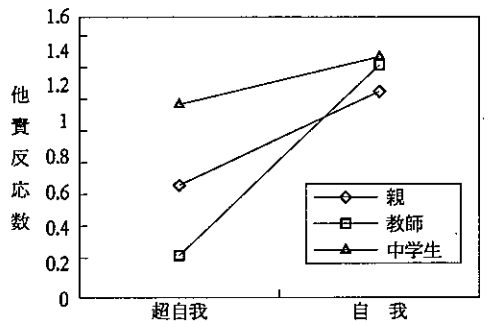


Figure 3
対象要因と阻害要因別にみた他責反応数の違い

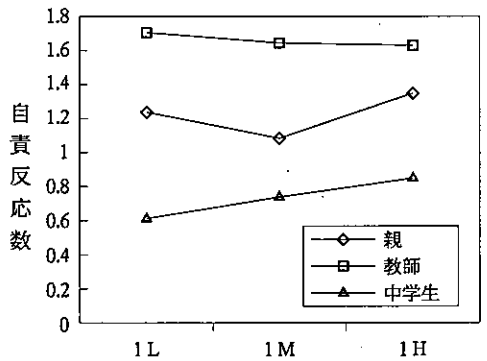


Figure 4
自信の無さ水準と対象要因別にみた自責反応数の違い

また，阻害要因の単純主効果は，いずれの対象についても有意差が確認された。多重比較を行ったところ，他責反応は，対象を問わず超自我阻害場面（M = 1.96, SD = 1.37）より自我阻害場面（M = 3.83, SD = 1.48）で多く表出された。

②自責反応の表出について

自信の無さ因子と対象要因の間で交互作用が有意であった（F (4,684) = 2.89, p<.05）。下位検定の結果，対象要因の単純主効果が認められたため，さらに多重比較を行った結果，因子の全水準において，中学生<親<教師の順に自責反応は表出されていた（Figure 4）。また，親場面では1H群（M = 1.33, SD = 0.82）が1M群（M = 1.06, SD = 0.84）より自責反応を有意に多く表出していた。

対象要因と阻害要因の交互作用が有意であった（F (2,684) = 191.80, p<.001）。下位検定の結果，対象を問わず，自責反応は自我阻害場面（M = 0.20, SD = 0.45）より超自我阻害場面（M = 1.14, SD = 1.52）で多く表出されていた。また，対象要因における単純主効果が有意で，自我阻害場面では，教師（M = 0.03, SD = 0.36）や中学生（M = 0.03, SD = 0.20）より親（M = 0.13, SD = 0.36）に対して，自責反応が多く向けられた。超自我阻害場面では，中学生（M = 0.71, SD = 0.72），親（M = 1.08, SD = 0.76），教師（M = 1.63, SD = 0.61）の順に反応数が多かった（Figure 5）。

他者志向因子と阻害要因の交互作用が有意であった（F (2,342) = 8.50, p<.001）。下位検定の結果，他者志向因子の単純主効果が認められ，超自我阻害場面において，自責反応は2L群（M = 2.97, SD = 1.46），2M群（M = 3.41, SD = 1.56），2H群（M = 3.87, SD = 1.41）の順に表出された。また，阻害要因の単純主効果も認められ，因子の全水準において自我阻害場面（M = 0.20, SD = 0.45）より超自我阻害場面（M = 3.41, SD = 1.52）

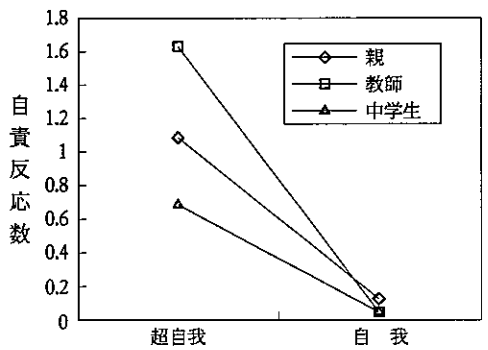


Figure 5
対象要因と阻害要因別に見た自責反応数の違い

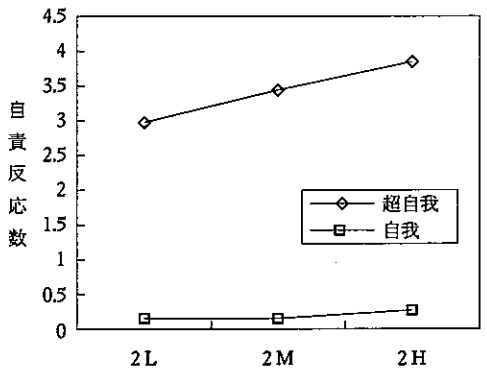


Figure 6
他者志向水準と阻害要因別にみた自責反応数の違い

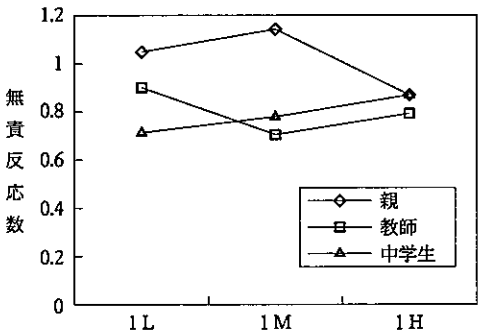


Figure 7
自信の無さ水準と対象要因別にみた無責反応数の違い

で，自責反応は多く表出された（Figure 6）。

③無責反応の表出について

自信の無さ因子と対象要因の間に交互作用が認められた（$F(4,684) = 3.73, p<.05$）。下位検定の結果，対象要因の単純主効果が，因子の全水準において有意であった。さらに多重比較を行った結果，1L群は，中学生（$M = 0.72, SD = 0.79$）よりも親（$M = 1.05, SD = 0.91$）に対して，1M群は，教師や中学生より親に対して，自責反応を多く表出した（Figure 7）。

また，対象要因と阻害要因の間に交互作用が認められた（$F(2,684) = 4.26, p<.05$）。下位検定の結果，阻害要因における単純主効果が，対象要因の全水準で有意であった。欲求不満の対象を問わず，無責反応は，超自我阻害場面（$M = 0.62, SD = 0.84$）より自我阻害場面（$M = 1.98, SD = 1.42$）で多く表出された。一方，対象要因における単純主効果が，自我阻害場面と超自我阻害場面の双方において有意であり，超自我阻害場面では教師（$M = 0.12, SD = 0.36$）より親（$M = 0.30, SD = 0.53$）

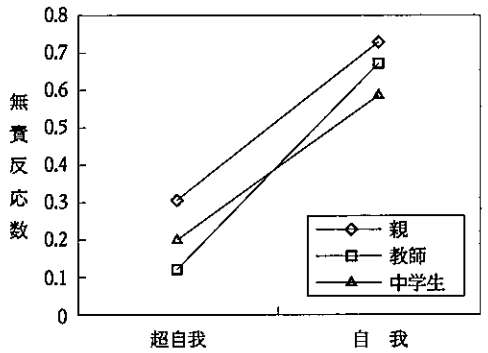


Figure 8
対象要因と阻害要因別にみた無責反応数の違い

に対して，自我阻害場面では中学生（$M = 0.59, SD = 0.68$）よりも親（$M = 0.72, SD = 0.69$）に対し，無責反応を多く表出した（Figure 8）。

考　察

主成分分析（バリマックス回転）の結果，2因子が抽出され，それらを「自信の無さ」「他者志向」と命名した。この因子構造から，他者の要求や社会的規範に応えるよう努力し，その結果としての他者からの評価を非常に気にかけているという過剰適応の状態像が浮かび上がった。

各因子得点の性差を検討したところ，「自信の無さ」において性差が確認された。女子は男子より，「間違ったことを言ったり，したりするのが怖くて引っ込み思案になる」「周囲の顔色をうかがってしまう」など，他者評価を過度に気にかけ，自分の意見や感情を表現することを躊躇している。このように，感情表出の制御を多く行うことは，友人関係の満足感及び精神的健康のような内的適応面に望ましくない（崔・新井，1998）。女子中学生は，福富（1997）が言うように，仲間はずれにならないように細心の注意を払いながら，とにかく仲間と一緒に行動し，仲間内の流行に遅れたり，はずされたりしないように強く同調している。したがって，一見適応的であるが，内的適応面には望ましくない女子中学生の仲間集団に対する過剰適応的な集団維持のあり方が示唆された。

本研究の目的は，過剰適応と攻撃性の表出方向の関連を明らかにすることであった。過剰適応している者は，「反抗や敵意のようなネガティブだが人間的な感情をまるで悪いもののように抑圧してしまう」（渡辺，1977）ため，欲求不満場面での攻撃性表出の方向には，過剰適応の特徴が顕著に現れると考えられる。分析の結果，他

者志向的な態度を多くとる者ほど，他責反応が少なく，自責反応を多く表出することが明らかになった。自責反応とは，後悔と罪の意識（remorse and guilt）を持って反応し，置き換え（displacement），感情分離（isolation），帳消し（undoing）などの防衛機制を用いる反応である（住田・林・一谷，1964）。したがって，本研究で得られた結果は，他者から優れた評価を得ることを重視し，他者の意向に左右されやすい他者志向的な態度が，外界との摩擦を避けようとする行動を導いていると考えられる。欲求不満場面で，怒って，敵意をもって反応することは，他者との間に摩擦を生じさせることにもなり，必ずしも適応的な対処とは言えない。冨永・清水・森・佐藤（2000）は，中学生男子及び大学生の場合，精神的に不安定な者ほど，怒りを口調や態度で示すこと，高校生女子及び男子の場合，精神的に不安定な者ほど，怒りを抑制することを明らかにした。つまり，攻撃性を過多に抑制したり，過多に表出することは，どちらも精神的に健康とは言えない。自分を責めることで欲求不満事態を解決しようとする過剰適応の者は，精神的に不健康な状態を継続して経験していると考えられる。

本研究で呈示した欲求不満場面は，刺激語を話している人物を親，教師，中学生の3種類に加え，他者または非人為的な障害が原因となっている自我阻害場面，原因が自分にあって，相手から非難や叱責を受けている超自我阻害場面を用意し，計12場面であった。以上の対象要因と阻害要因の，過剰適応と攻撃性表出に対する影響について考察する。

分析の結果，自責反応の表出に関しては，「自信の無さ」の水準と対象要因との交互作用，「他者志向」の水準と阻害要因との交互作用が有意であった。自責反応は，「自信の無さ」の水準によらず中学生，親，教師という順に多く表出されていた。また，自責反応は，「他者志向」の水準によらず，自我阻害場面より超自我阻害場面で多く表出された。さらに，親が関わる場面では，主張することに自信のない者ほど自責的な発言をした。これは，親の言動に理不尽さを感じたとしても，自分が悪いのだと言うことで，自分以外の誰にも迷惑をかけずにその状況を収拾しようすることを示している。斎藤（1976）でも確かめられたように，教師や中学生という比較的フォーマルな対人関係において喚起された攻撃性は，他者評価や上下関係の存在が影響し表出されにくい。また，Underwood, Coie & Herbsman（1992）は，怒りと攻撃行動において，仲間より教師に対して制御を多く行うことを報告している。しかし，本研究の結果では，親子関係ですら感情を歪めて，修正して，当たり障りの無い形で表出しているということが示された。以上のことから，中学生は，教師と親が，学校・家庭での厳しい評価者として見ており，否定的なイメージや評価を持たれては困る存在として捉えているということが示唆された。過剰適応の形成要因について研究した橋本ら（2003）は，見捨てられ不安が強いために自己主張に対する不安を抱えていることを明らかにしている。また，「見捨てられ抑うつ」を強く体験している者は，自己の主観的感情を正確に見極めることが困難であるアレキシサイミア傾向に陥りやすい（佐々木，2000）との報告もあり，過剰適応の者がどのような親子関係を築いてきたかということが問題になる。幼児期に母親が，Good-enough Motherとしての役割を果たせなかった場合，幼児は「偽りの自己」（false self）を発達させる。これは，「真の自己がどんなものであれ，隠蔽し，保護する防衛的性格を有するため，偽りの自己を真の自己の姿と見誤ってしまい」，ついには偽りの自己によって真の自己が食い物にされてしまう（Winnicott，1965）。今後，過剰適応に至るメカニズムを理解するためには，早期の親子関係，家族関係の観点からの検討が必要である。

引用文献

崔　京姫・新井邦二郎　1998　ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係　教育心理学研究，46，432-441.

福西勇夫　2001　いわゆる「心身症」　こころの科学，95，54-59.

福富　譲　1997 思春期が人生の中でもつ意味　児童心理2月号増刊，3-12.

橋本ゆき子・斉藤和恵・衛藤義勝　2003　過剰適応尺度作成の試み(2)　日本心理学会第67回大会論文集，286.

林　勝造　1987　P-Fスタディ解説 三京房

北村晴朗　1965　適応の心理　誠信書房

桑山久仁子　2003　外界への過剰適応に関する一考察　京都大学大学院教育学研究科紀要，49，481-493.

向出佳司　2000　思春期の自己主張における理論と方法に関する一考察　皇學館大學社会福祉学部紀要，3，177-182.

長坂正文　1997　登校拒否への訪問面接 - 死と再生のテーマを生きた少女　心理臨床学研究，15，237-248.

斎藤 勇　1976　修正PFスタディによる親子関係，兄弟関係，友人関係における攻撃の方向と反応型に関する研究　立正大学教養部紀要，9，42-46.

佐々木裕子　2000「見捨てられ抑うつ」とアレキシサイミア傾向―「見捨てられ抑うつ」尺度による検討―　福岡教育大学紀要　49，221-228.

住田勝美・林　勝造・一谷　彊　1964　ローゼンツアイク人格理論　三京房

冨永美穂子・清水益治・森敏昭・佐藤一精　2000　中学生，高校生，大学生の食生活を中心とする生活リズムと怒りの表出との関係　広島大学教育学部紀要第一部，**49**，15-22.

Underwood, M. K., Coie, J. D., & Herbsman, C. R. 1992 Display rules for anger and agression in schoolage children. Child Development, **63**, 366-380.

渡辺久子　1977　青年における自我同一性の確立と親子関係　青年心理，**2**，104-109.

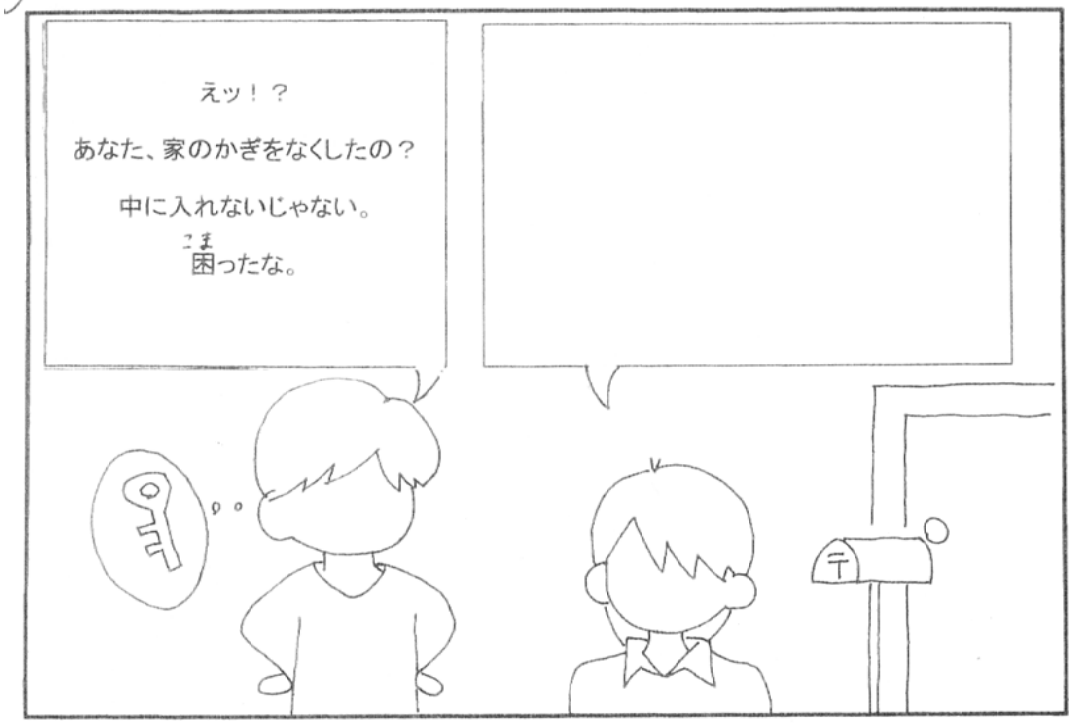
Winnicott, D. W.（牛島定信訳）　1965　情緒発達の精神分析理論　岩崎学術出版社

山川法子　2001 いわゆる「よい子」の特徴および「よい子」を作り出す規定因に関する考察 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）**48**，1，47-54.

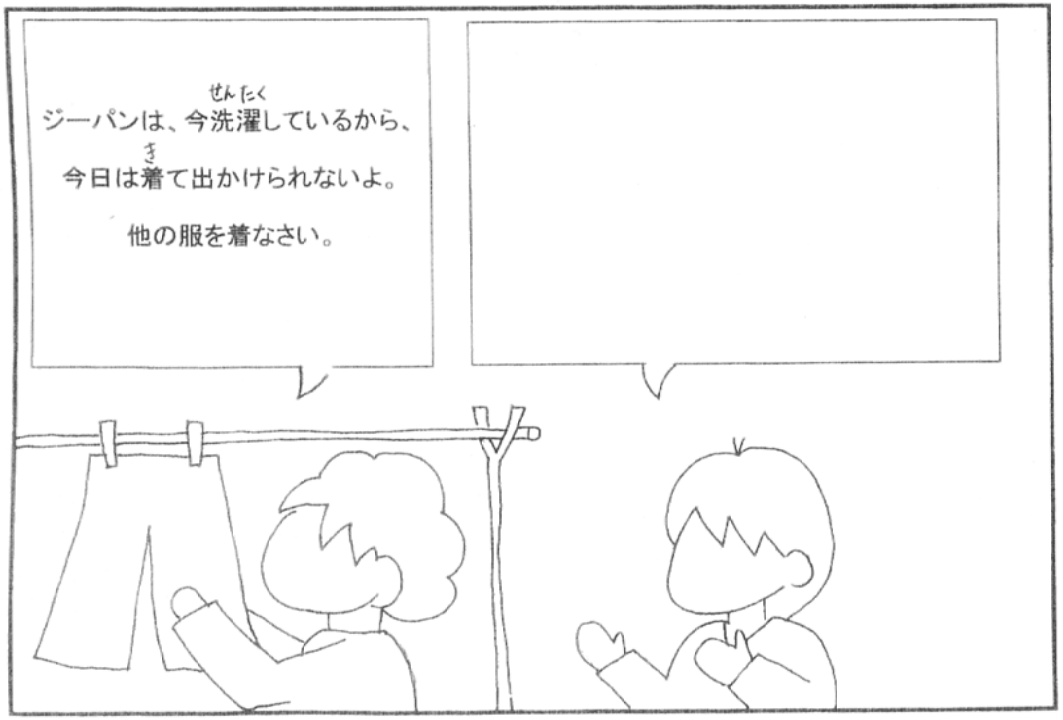
吉川ゆき子・斉藤和恵・衛藤義勝　2002　過剰適応尺度の作成 日本心理学会第66回大会論文集，286.

— 2004.11. 3 受稿，2005. 7. 2 受理 —

塾を休んでばかりいるから、
今回のテストも悪い点数なんだよ！

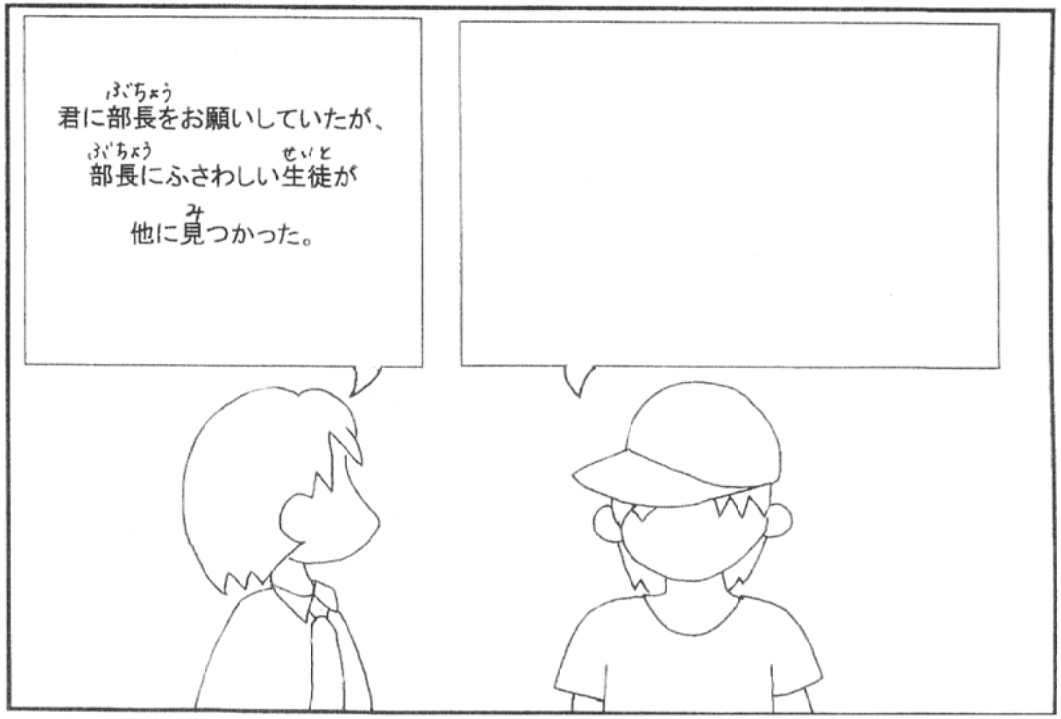

えッ！？
あなた、家のかぎをなくしたの？
中に入れないじゃない。
困ったな。

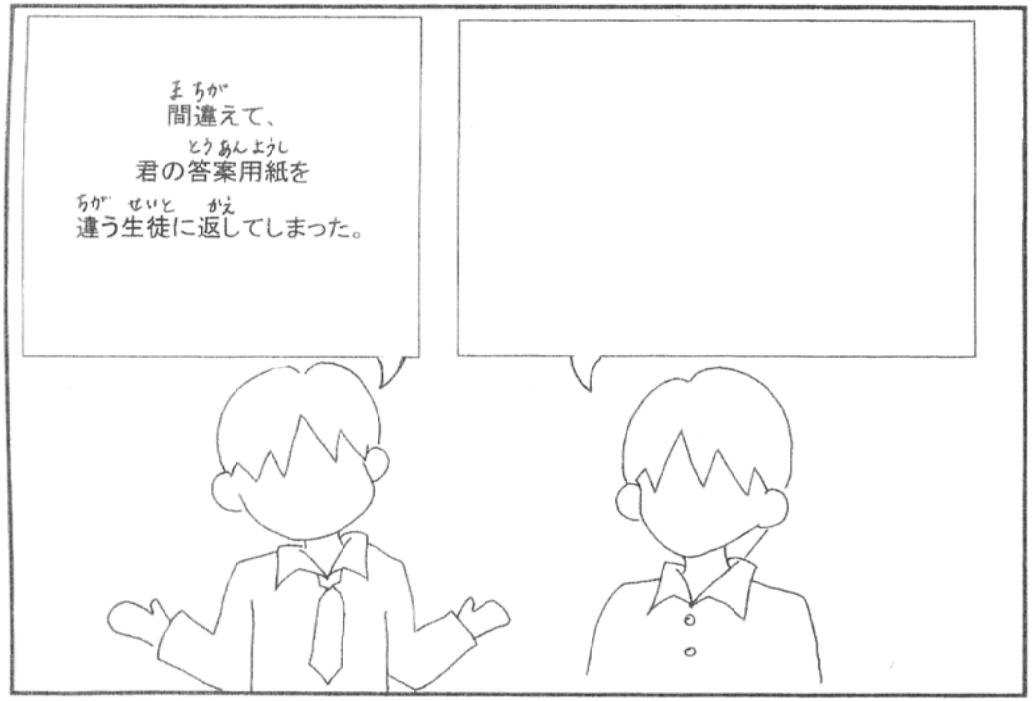
あの子と遊んでばかりいると、
内申点が悪くなるでしょ。

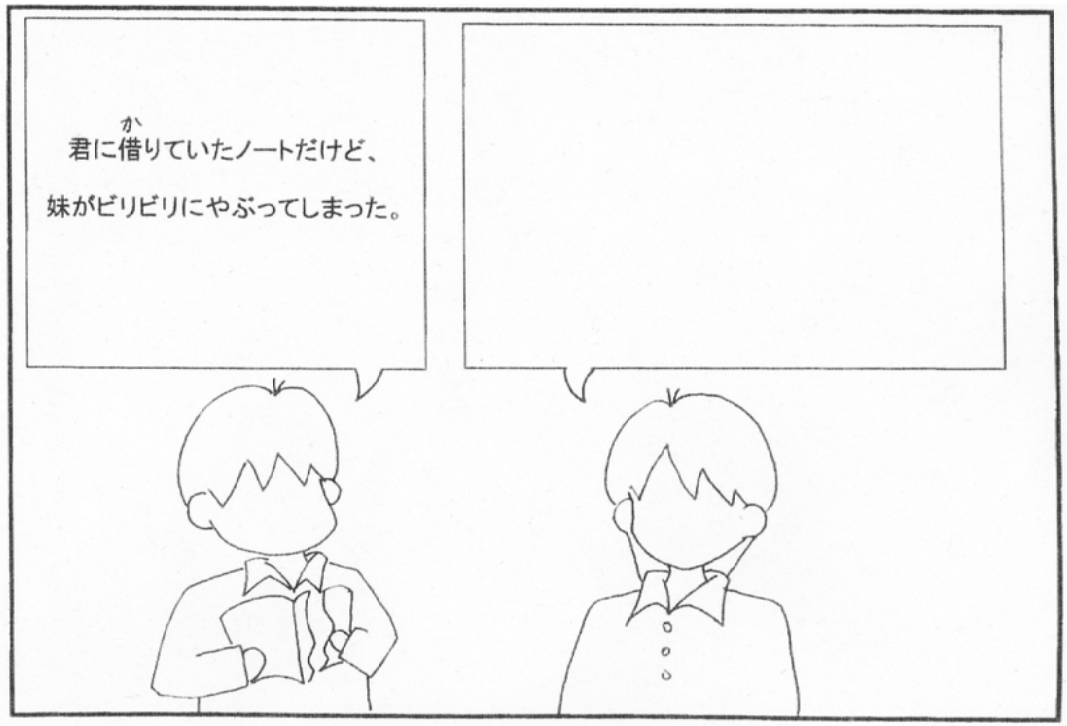

ジーパンは、今洗濯しているから、
今日は着て出かけられないよ。
他の服を着なさい。

いいかげんなことばかり
しているじゃないか。
あなたは、
自分の係りに責任をもっていない。

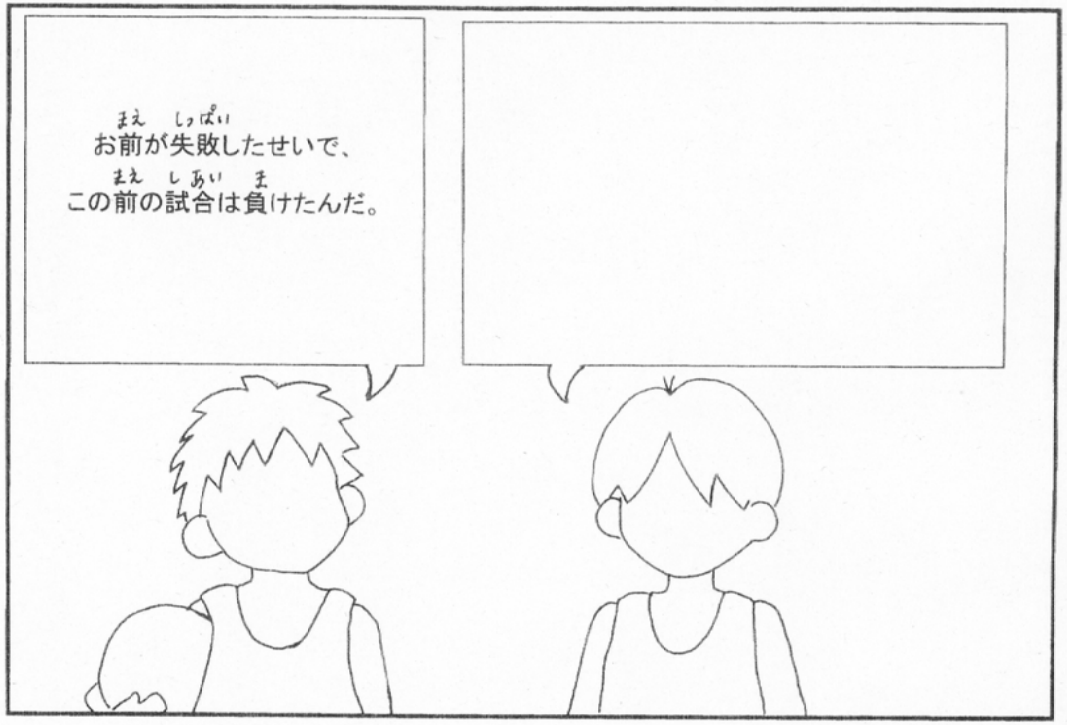
君は、毎日、
忘れ物ばかりしているじゃないか。

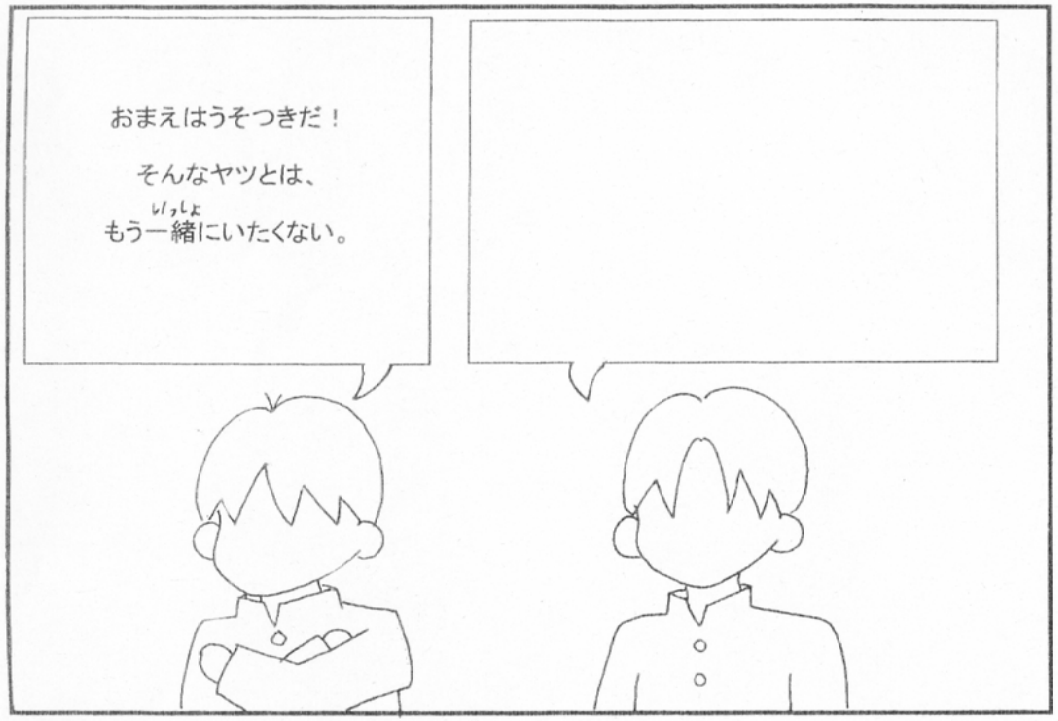

君に部長をお願いしていたが、
部長にふさわしい生徒が
他に見つかった。


間違えて、
君の答案用紙を
違う生徒に返してしまった。


君に借りていたノートだけど、
妹がビリビリにやぶってしまった。

ぼくの勝ちだ！
じゃあ、これは全部、
ぼくがもらっていくよ。


お前が失敗したせいで、
この前の試合は負けたんだ。


おまえはうそつきだ！
そんなヤツとは、
もう一緒にいたくない。

過剰適応に関する研究

―欲求不満場面における攻撃性表出の観点から―

研究者　小野 由衣子
指導教官　宮本 正一先生

過剰適応(overadaptation)とは

- 外的適応

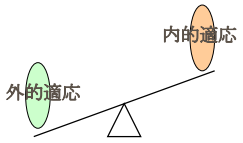
社会や現実の要求に応じて，自分の属性を変化させていく過程と状態

- 内的適応

内面的に幸福感と満足感を経験し，心的状態が安定していること

- 過剰適応

外的適応が重視されすぎ、
内的適応がなおざりの状態



目的

- 親、教師、中学生が欲求不満の原因となる場面をそれぞれ提示し、そこでの攻撃性表出の方向と、過剰適応得点との関連を分析することで、中学生の過剰適応状態について検討する。

従属変数　攻撃性の方向

- 他責反応：攻撃が他者や物、状況に向けられる
- 自責反応：自分自身に向けられる
- 無責反応：欲求不満をうまくごまかしてしまうか、うわべを繕って攻撃自体を避ける

方法

- 調査対象

岐阜県内公立中学校に通う中学2年生345名
（男子159名，女子185名）

- 調査時期

平成15年10月中旬から11月中旬

- 調査方法

個別記入方式の質問紙調査を無記名で実施。中学校教諭に実施を委託。実施時間は約20分であった。

方法　【調査内容】

①過剰適応尺度　　25項目

5件法

全く当てはまらない（1点）／あまり当てはまらない（2点）／どちらともいえない（3点）／やや当てはまる（4点）／とてもよく当てはまる（5点）

改定点

- 中学生の文章の理解力を考慮し，容易に文意を把握できるような表現に変更。
- 過剰適応の特徴を表していると考えられる文献中の記述を参考にして，4項目を新たに追加し，25項目に再構成した。

方法 【調査内容】

②P-F study型投影法

阻害要因

- **自我阻害場面**
  他者または非人為的な障害が原因となってフラストレーションが起きている場面
- **超自我阻害場面**
  フラストレーションの原因が自己にあって，相手から非難や叱責を受けている場面

対象要因

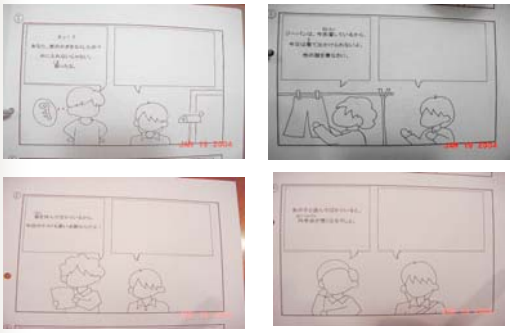
- 親
- 教師
- 中学生

刺激語一覧

P-F study型投影法 刺激語

親が中学生に話しかけている場面	
超自我阻害	「え！？家の鍵をなくしたの？中に入れないじゃない。困ったな。」
	「塾を休んでばかりいるから，今回のテストも悪い点数なんだよ！」
自我阻害	「ジーパンは，今洗濯しているから，今日は着て出かれられないよ。他の服を着なさい。」
	「あの子と遊んでばかりいると，内申点が悪くなるでしょ。」
教師が中学生に話しかけている場面	
超自我阻害	「君は毎日忘れ物ばかりしているじゃないか。」
	「いい加減なことばかりしているじゃないか。あなたは，自分の係に責任をもっていない。」
自我阻害	「間違えて，君の答案用紙を違う生徒に返してしまった。」
	「君に部長をお願いしていたが，部長にふさわしい生徒が他に見つかった。」
中学生が中学生に話しかけている場面	
超自我阻害	「おまえはうそつきだ！そんなヤツとは，もう一緒にいたくない。」
	「お前が失敗したせいで，この前の試合は負けたんだ。」
自我阻害	「ぼくの勝ちだ！じゃあ，これは全部，ぼくがもらっていくよ。」
	「きみに借りていたノートだけど，妹がビリビリにやぶってしまった。」

P-F study型投影法 親場面



P-F study型投影法 教師場面

P-F study型投影法 中学生場面

結果と考察 【因子構造】

- Factor1:**「自信の無さ」因子**
  自信の無さ、主張行動への戸惑い
- Factor2:**「他者志向」因子**
  周囲から優れた評価を得る存在になろうとする他者志向的な態度
- 因子得点の性差

自信の無さ因子: $t = 3.39$, $p<.001$　男子＜女子
他者志向因子: n.s.

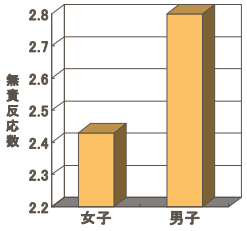
主成分分析の結果

	項目	第1因子	第2因子
● 自信の無さ因子			
12	自分の言ったことやしたことに自信がない	**0.785**	0.071
19	間違ったことを言ったり、したりするのがこわくて、引っ込み思案になる	**0.743**	0.143
25	本当の自分を出すと人に嫌われるのではないかと思う	**0.697**	0.068
23	自分の意見を言うことが少ない	**0.645**	−0.22
2	周りの人が自分をどう評価しているかが気になって、自分のしたいように行動できない	**0.639**	0.329
14	周りの人の顔色をうかがってしまう	**0.583**	0.355
24	自分のことについて考えるのが苦手だ	**0.49**	−0.203
9	周りの人に反対されると自分の意見を変えてしまう	**0.474**	0.169
20	自分が悪かったのではないかと後悔することが多い	**0.469**	0.236
● 他者志向因子			
17	周りの人に迷惑をかけないようにいつも気を配っている	0.263	**0.654**
13	たいていの規則を守っている	0.116	**0.636**
4	親の言いつけはほとんど守っている	−0.078	**0.631**
7	親や先生の期待にはできるだけこたえるように努力する	−0.075	**0.613**
3	いつもほめられたいと思っている	0.101	**0.558**
5	自分がどうしたいかよりも、どうすべきかの方が先に思いうかぶ	0.058	**0.44**
16	自分がどう感じているかに関係なく、目上の人の言うことはきく	0.268	**0.424**
	固有値	3.68	2.73
	寄与率(%)	23.02	17.06
	累積寄与率(%)	23.02	40.08

性と無責反応の関係

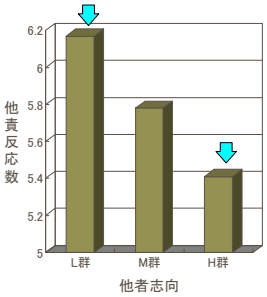
- 無責反応の表出は男子に多い。
- 見捨てられ不安
- 愛情喪失への不安

自己欺瞞的な反応



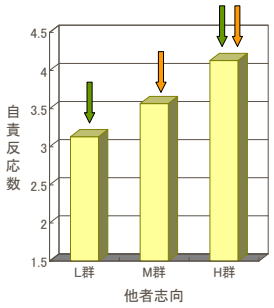
他者志向因子と他責反応の関係

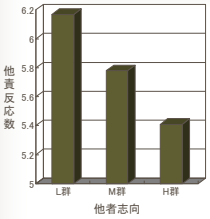
- 他者志向的な態度が、他責反応を抑制する。

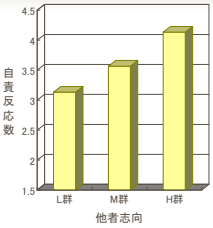


他者志向因子と自責反応の関係

- 他者志向的な態度は、自責反応の表出と関係がある。





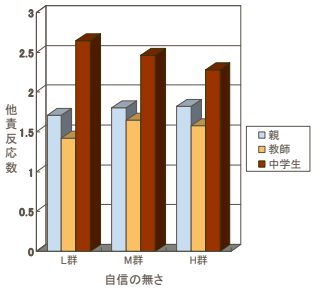


他者志向的な態度 ⇒

- 自責反応の出現
- 他責反応の抑制

他責反応の表出における[自信の無さ×対象]

- (親・教師)＜中学生
- 仲間に対して他責反応の表出数が多い。

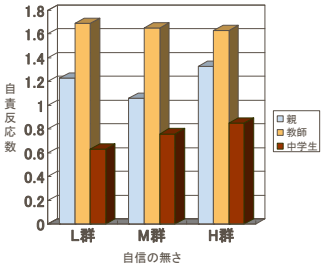


自責反応の表出における [自信の無さ×対象]

- 中学生＜親＜教師

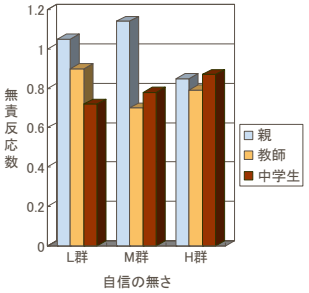
  教師に対して、自責反応の表出が多い。

- 自信の無い者は、親との関係の中で、自責反応を表出しやすい。



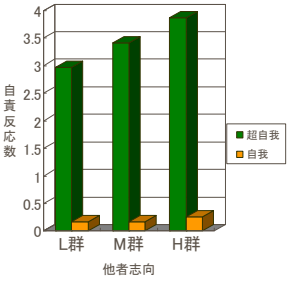
無責反応の表出における [自信の無さ×対象]

- 親に対して、無責反応の表出が多い。



自責反応の表出における [他者志向×対象]

- 他者志向的な態度の高い者は、超自我阻害場面で自責反応を表出しやすい。



まとめ

- 中学生は、親に対してネガティブな感情を表現できずにいること
- 他者を気にし、その期待に沿おうと努力している者ほど、その内面では自己を責めていること